

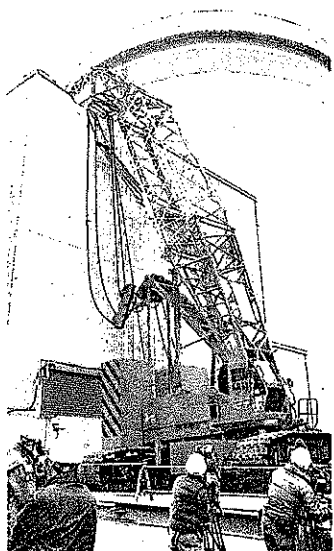
1/22
福井

高浜原発クレーン倒壊

2号機 燃料建屋一部壊す

20日午後9時50分ごろ、関西電力高浜原発で、安全対策工事に使っている大型クレーンが倒れ、2号機の使用済み燃料などを保管している燃料取り扱い建屋と原子炉補助建屋の屋根や外壁が一部損壊した。関電によると折れ曲がったクレーンのアームは建屋の内部までは貫通しておらず、辺境への影響はなく、けが人もなかった。

【29面に関連記事】
高浜2号機は1号機とともに運転開始から40年を超える



関西電力高浜原発2号機の燃料取り扱い建屋(左)を直撃し、アームが折れ曲がった大型クレーン。後方は原子炉建屋=21日午前10時半ごろ、高浜町の同原発

古い原発だが、昨年6月に東京電力福島第1原発事故を踏まえた新規制基準のもとで初めて、運転延長が認められ、

2020年の完工を目指して安全対策工事が行われていた。原子炉容器の上部にコンクリート製のドーム屋根を設

置するため、昨年10月から足場を組み作業を進めていた。倒壊したクレーンの鋼製アームは全長約11.2メートルで、通

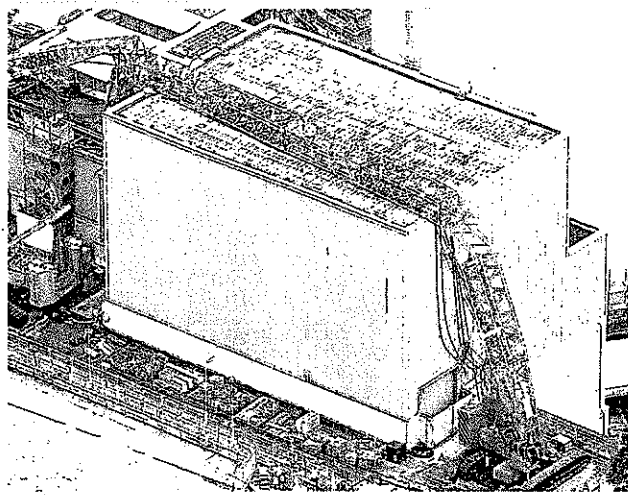
常の使用時とは逆方向に倒れ、燃料取り扱い建屋上部の角に直撃して変形し、二つの建屋の上に横たわっているような状態。鉄筋コンクリート製の天井部分(厚さ約15センチ)への貫通や落下物はなく、燃料への影響はないという。使用済みと新燃料合わせて259体が保管されている。

原子力規制庁は事故後、現地に保安検査官を派遣。燃料建屋内部の壁面パネルの一部に隙間を確認した。

事故当時、周辺では暴風警報が発せられ風速10メートルを超える強風が吹いていた。中央制御室にいた宿直員が大きな音を聞いてクレーンの倒壊が判明した。

関電は「現時点で原因は特定できない」と断言を避け、原因解明と再発防止策がまとまるまで、同様の工事を中断する方針を示した。(前田卓)

1/22
3/22



関西電力高浜原発2号機の燃料取り扱い建屋に向かって倒れたクレーン。21日午後、高浜町共同通信社へりから。

高浜原発 クレーン倒壊

暴風警報中「ドーン」

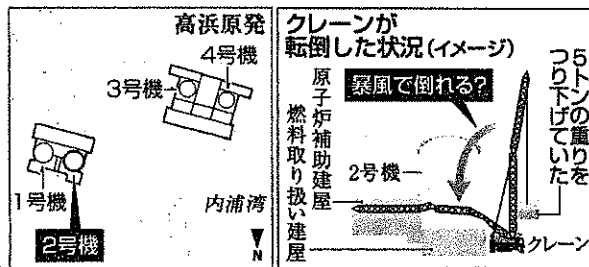
関電 原因特定できず

暴風警報発令中の20日夜、中央制御室内に「ドーン」という大きな音が響いたという。関西電力高浜原発で起きたクレーン倒壊現場では、鋼製のアーム部分がぐにやりと曲がり、建屋の屋根の上に横たわっていた。放射性物質漏れや人身事故にもつながりかねなかった事態に対し、関電は一夜明けた21日の記者会見で「詳しく解析しないと原因

は特定できない」との説明を繰り返した。【一面に本記】同日午前11時すぎ、高浜原発構内であった記者会見は、高島昌和・高浜発電所運営統括長らが「このような事象を発生させ、深くおわび申し上げます」と頭を下げてから始まった。関電によると日中の作業を終えたクレーンは通常、アーム先端から垂らしたワイヤに重りを付けて接地さ

せ安定した状態にする。強風で倒れる恐れがある場合や年末年始などの長期休業時は、アームを折たたんだり一部解体したりして、より安全な策を取るといふ。クレーンは総重量270トで、5トの重りで安定させていたが、現場ではクレーンが傾き、キャタピラの片方は数十センチ浮いた不安定な状態になっていた。

原発構内2カ所にある風速計の数値は事故当時14、15メートル。5トの重りで風速42メートル



強風に耐えられる評価基準に基づき、高島統括長らは「通常の安定させる方法で」問題ないと判断した」と言い切った。ただ「いつ、だれの判断か」との問いには言及を避けた。クレーンの構造や強度といったハード面や、アームの組み立ての状況など人為的要因とも否定できないとし、「原因を究明し、二度と繰り返さないようにしたい」との説明に終始した。運転延長に向けた安全対策工事再開の見通しは「原因が分かり対策ができた状態になれば再開するが、現時点では見通しは立っていない」とした。(前田卓)